特集
途上国とコイン

中国 ―コインにまつわるよもやま話―

山田七絵

●「私はお金が大好きです」

数年前に中国の大学で日本語教師をしていた日本人の友人から聞いた笑い話だが、彼女はある時学生に「私の好きなもの」というテーマで日本語作文の課題を出した。その際わかりやすい文章を書くコツとして、冒頭に一番重要なメッセージを書くようアドバイスした。数日後、ある学生が提出した作文の一行目に書かれたのが冒頭の一文である。学習中の外国語で書いたという拙さを差し引いてもあまりの素直さに笑いを禁じえない。名誉のために言い添えれば、この学生は決して守銭奴というわけではなく自分や家族の生活のためにお金は必要不可欠だ、という主旨でこの作文を書いた。中国において金銭が話題にならない日はなく、人々にとって一と言って二と下らぬ関心事であることは容易に察せられる。初対面の相手に対しても給料、家賃から夕飯のおかずの値段に至るまで細々と質問しても失礼には当らないし、これらはごく他愛のない日常的な話題に過ぎない。ここでは中国の人々の生活と切り離せない「お金」、特にコインの話をしたい。三〇〇〇年以上にわたる中国の貨幣史を語るのは筆者の手に余るので、個人的な体験も交えて現在のコイン事情に関する話をしたい。

●もっぱら脇役

現在流通している硬貨は額面の大きいものから順に一元、五角、一角（一元は約一五円、角は元の一〇分の一）である。中国人民銀行は一九五五年に硬貨の発行を開始し、これまでに額面やデザインを四回変更した。第一期（一九五五～九二年）に発行された三種類のアルミ製の分（角の一〇分の一）硬貨は現在では銀行で利子の支払い等に使用される以外ほとんど絶滅寸前だが、「中国人民銀行法」には何人たりとも分硬貨による支払いを拒否してはならない、とわざわざ明記されている。ただし、発行量の少ない二分硬貨は蒐集家の間で高値で取引されている。

残念ながら（特に北方では）日常生活において硬貨は影が薄い。硬貨の全種類の額面に加え二角紙幣まで発行されており、代替可能だからかもしれない。実際公園などで将棋や麻雀で人々が小銭を賭けている時、卓上に散らばっているのはたいてい紙幣である。街に自動販売機はほとんど無く、地下鉄の券売機では紙幣が使える。大都市の公共バスではチャージ式カードが普及し、かつて大きな鞄を首から提げて切符をさばいていた車掌の仕事は専ら乗客がカードを正しくパネルに接触させたかどうかの監視になってしまった。

報道での取り上げられ方も然りで、最近硬貨が登場したのは駐車料金の一部を小銭で払った女性が係員に小銭を目の前で投げ捨てられ抗議した、というなんとも寂しい事件であった。これに対し紙幣の報道は景気が良い。例えば一時期不動産バブルの象徴として恐れられた「温州炒房団」（温州出身の不動産投機集団）は、麻袋一杯に札束を詰め、大型バスで各地の大都市に乗り付け不動産を買い漁った。実際見たわけではないが、袋から無造作に取り出され、積み上げられる札束の鮮やかな赤が目に浮かぶようである。某団体は、当局の情報統制に対抗して一元札に反政府メッセージを印刷し流通させたと国際的に報道された。筆者もその一枚を偶然釣銭として受け取ったことがある。まさにカネは天下の回り物、なのである。

では、市民は一体どこでコインを使うのか。筆者が滞在した二〇〇八～一〇年当時の北京と青島では、一元硬貨をタクシーや商店の釣り銭として時々目にするものの、小額硬貨を使う場所はスー

パーくらいに限られていた。とはいえレジの機械から律儀に飛び出してくる五角や一角の小銭を受け取ると、はてどう処理したものかとむしろ面倒な気分になり、結局そのままスーパーの出口にある義捐金の箱に投入するのが常であった。一方「農貿市場」と呼ばれる小規模な食料品市場では量り売りで値段交渉にも応じてもらえるが、端数はおまけなどで調節されてしまうため、一元以下の小銭が必要になることはほぼなかった。南方ではコインの使用頻度がもう少し多いようだが、これも南北の気質の違いに起因するのかもしれない。北京の友人たちは自分達の大らかさを誇り、「北方人はネギを束で買うが、ケチで細かい上海人は一本一本買う」と言ってはよく笑いの種にしていたものだ。

1元ショップ（福建省厦門市、2010年1月筆者撮影）

●コインが主役の一夜

かように日頃は軽んじられがちなコインであるが、一部の地域では年に一度だけ一家の注目を一身に受けることができる。北方中国では年越しの夜に家族全員で餃子を食べる習慣があるが、一部の地域で餃子にコインを仕込み、コインの入った餃子が当たった人にはその一年金運がもたらされるとする風習がある。筆者の友人宅では、餃子の皮を破らない大きさという理由から中に入れるコインは一元ではなくいつも脇役の一角硬貨であった。そもそも中国で餃子が縁起物である理由のひとつは形が古代の銀貨に似ていることにある。それでも飽き足らず、更なる金運を祈願するこの風習からも、お金＝幸せという図式が素直に受け入れられる実利主義的な気質がみてとれる。年初の挨拶も「新年快楽、恭喜発財、紅包拿来（新年おめでとう、商売繁盛、お年玉頂戴）！」と直接的である。

当然といえば当然であるが、子供や高齢者がコインを誤飲する事故も発生しているようで、餃子に硬貨を入れる風習による健康への悪影響を指摘し、注意を喚起する雑誌記事まで出ている（姜広媛「莫往餃子里放硬幣」『農業知識』二〇〇一年〇二期）。北方出身の友人に聞くと古くからの習慣だそうだが、安全面、衛生面への配慮からか現在は少なくなったようだ。硬貨の代わりに落花生、飴、果物などを入れる地域もある。

●金の鉱脈

通常の硬貨以外に、新年や国家行事に合わせて記念コインも発行されている。干支の記念コインの発行数はここ数年三〇〇〇万セットであったが、二〇一二年は六〇年に一度の特に縁起が良い辰年に当たるためか八〇〇〇万セットに増加した。シリアルナンバー入り記念コインは政府が流通を管理し、郵便局など指定された場所で購入できる。少なくとも、表向きはそういうことになっている。

二〇〇七年秋、筆者は現地の農協研究者の案内で山東省農村の青果物合作社（一種の農協）を訪れた。登場した社長はおよそ農協らしからぬパリッとしたスーツに身を包んだ青年実業家風の人物であった。翡翠製の巨大な白菜（商売繁盛の縁起物）の飾られた、内装も新しい豪華な事務所で合作社の話を聞き、果物の貯蔵庫などを見学し終わると、彼はここからが本番とばかりに私たちを外へ連れ出し、一〇〇万元は下らないというドイツ製高級車に乗せた。真新しい車体に泥が跳ね上がるのもかまわず、未舗装の農道を走らせて彼の本業―鉱山と精錬所へと向かったのである。実は、彼は中央に強力なコネを持ち、県内の金鉱山をいくつも経営するやり手実業家で、合作社は数ある投資先のひとつにすぎなかった。深く暗い坑道から出入りするトロッコ、切り出した鉱石が砕かれ、ベルトコンベアーで精錬施設へ運ばれる様などを見学した。別れ際に彼が私たちへの土産にと次々に出してみせたのは―山のようなオリンピック記念コインだった。

筆者は狐につままれたような気分で帰途につき、同行者は車中で「彼は協同組合を誤解している」とつぶやき、うなだれた。

（やまだ　ななえ／アジア経済研究所　環境・資源研究グループ）